

生成研究の見事な〈デモンストレーション〉：吉田城『「失われた時を求めて」草稿研究』

吉井，亮雄
九州大学文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19371>

出版情報：流域. (38), pp. 52-55, 1995-02-28. 青山社
バージョン：
権利関係：

生成研究の見事な〈デモンストレーション〉

——吉田城『失われた時を求めて』草稿研究——

吉井亮雄

『失われた時を求めて』新ブレイアッド版（全四巻）の編纂を指揮したジャンロイヴ・タディエは、第一巻出来とあい前後して出版した自著『二十世紀の文学批評』（ベルフォン、一九八七）の最終章を「テクスト生成研究」にささげ、その発展・深化の歴史をたどりつつ、

生成論の現代的な意義を説いている。しかしながら彼は同時にひとつの留保、つまり、それが今もなお「結局は学術的批評や〈大学〉批評が示す関心」にとどまるといふ指摘を忘れてはいない。じつと、わが国でもとりわけここ十年ほどの生成論の隆盛は目を見はるばかりだし、いわゆる〈決定稿〉を聖別化する伝統的な草稿研究にたいして、生成論は種々の自筆稿やタイプ稿、校正刷など先駆稿そのものが内包するダイナミズムに注目し、そこに独自の価値を認め

ようとするものだという根本的な相違はすでにかなり広く了解されてはいても、実際に時間をかけて草稿類を読みといた経験のない大多数の読者にとっては、この了解がなかなか具体的な実感となつてこないのではないか。

本書『失われた時を求めて』草稿研究の著者吉田城は、斯界ではだれひとりとして知らぬ者が不在であり、前出新ブレイアッド版の校訂・編纂への参加をはじめとして、ブルースト草稿研究におけるその輝かしい業績はあらためて紹介する必要もないほどだ。『小説の危機』（ジョゼ・コルテイ、一九六〇）で著名なミシェル・レーモンはパリ第四大学で優秀なブルースト研究者を数多く育てたことでも知られるが、そのもとで学んだ者ならばだれでも、この大家がセミネールや私的な歓談のなかでかつて学位論文を指導した吉

田の名をあげるとき、口調に確かな信頼と畏敬の響きを宿らせることを知っている。かくのごとく学界の期待に応え目覚ましい成果をあげてきた人であるだけになおさらのこと、吉田がタディエの指摘するような、まだまだ限定された生成論への関心を一般読者にも共有させたいと強くのぞみはじめたとしてもなんら不思議ではあるまい。また本書執筆の背景には、筑摩書房版『プルースト全集』や鈴木道彦による『失われた時』の見事な抄訳(集英社)によってプルーストへの接近がいつそう容易になったという事情もあったと思われる。

*

まず「テキストの起源」と題された序論では、専門用語にかんする明確な規定とともに、生成論とは何か、何を目指しているのかが手際よく述べられる。もちろんこれは読者に基本的な予備知識をあたえ、以後の行論を容易にするために配されたものだが、簡潔にして要をえた記述は、ひとり生成論ばかりか、広く文学研究一般の手引きとしても示唆にとむ。じじつ書評者は、ある国文学者から、とりわけこの序論に啓発されるところが多いと聞かされた。なお、後半部で略述される作品の「誕生小史」には、大まかにでも『失われた時』の生成史を整理する年譜や図表が付されていれば随時の参照

に簡便ではなかったかという気がする。

第一章「コンプレー」は、いかにも本論の冒頭を飾るにふさわしく、『失われた時』の有名な書き出し「長い間、私は早くから寝た。Longtemps, je me suis couché de bonne heure.」の考察ではじまる。時制・人称にもとづくバンヴェニストやヴァインリヒの語りの分類を確認したうえで著者はまず、使用された複合過去が語りの現在時を指示する「緊張した発話」であること、だがそのいっぽう、「長い間」の起点・終点が不明確であり、それによって文全体としては「物語の時間的・空間的限定を拒否」していることをフランス語法上の用例を引きながら説得的にのべる。つづいて著者は草稿を年代順に追いつながら、しかしこの謎めいた冒頭文ははじめから特権的に選択されたものではなく、プルーストが執筆の初期段階から一九一三年の校正刷にいたるまで試行錯誤をくりかえしたこと、そしてその長い逡巡が小説全体の時間構造の発見と不可分に結びついていたことを異論の余地なく実証するのである。

また同章第二節では、挿話としてはおそらく最も有名なマドレーヌ菓子のそれがとりあげられる。すでに『ジャン・サントウイユ』に萌芽が認められる無意識的記憶の原理が、『サントロブルーヴに反して』や、『失われた時』の初期の草稿帳をへて、この挿話に凝縮されていくさまを追う著者の筆はとりわけ冴え、論旨の展開はスリ

リングでさえある。お茶とともに主人公に供されるのがトーストやビスコッパからマドレーヌへ——著者はこの菓子を選択に聖なる時の復活に立ち会うマゲダラのマリアへの暗示を見る——、またそれを寝室に連んでくるのが家政婦やフランソワーズという副次的人物から最愛の母へと、それぞれ特権化されていた事実じたいはさほど驚くにはあたらない。だが、挿話の構成要素が変更される過程で無意識的記憶の〈偶然性〉がしだいに強調され、同時にこの不可思議な記憶の謎を説明しようとする〈精神の努力〉がますます重要な位置を占めていったことを教えられるとき、読者は、挿話の生成が小説全体の必然的な内的要請によったこと、すなわち「無意識的記憶が小説のもっとも根本的な時間配列を規定しているとともに、最終的結論部でそれが主人公の文学理念となること」を実感せざるをえない。

つづく第三節では、主人公が少年だったころの「秋の散歩」の思い出をめぐってプルースト的エロスの問題が、また第二章「バルベックの方へ」に入ると、バルベックの教会が現実素材をえながら作家の想像力のなかでいかにして生成・変容していったかなどが、さらに第三章「母親と祖母」では主として「心の間歇」というすぐれてプルースト的な主題がとりあげられている。だが、草稿の読解にもとづいたテキストの細部にかんする鋭い分析の数々や、それら

が明快にして緊張感のある論旨展開によって大きな流れをかたちづくっていきさまは、書評者が味気ない概要紹介で贅言をかさねるよりは、読者各人に『失われた時』を読むのと同じようにゆっくりと本書の頁をくって玩味していただくべきだろう。いずれも文章には無駄がなく、しかも著者の知的探求の過程——すなわちそれは作品創造の過程でもある——を熱く伝える力編である。

ただ最後の第四章については一言しておくべきだろう。というのは、同章ではこれまでとはかなり趣がかわって、読者の注意を「作品生成の母体となるにふさわしい要素を備えた」いくつかのトピックに転じさせているからである。考察の対象となるトピックとは、章題が示すように「都市・書物・神経症」であり、程度の差はあれ、いずれもが作品に先行し、それに現実性と社会性を付与する外部的な要素といえるものだ。どんな文学作品も同時代の社会や文化・風俗の影響をうけないではいられないが、じじつ『失われた時』を読む者はだれでも、主人公の天職発見の物語の背後から、あるときは明瞭に、またあるときは陰画のように浮かび上がってくる近代都市パリのイメージを認めざるをえない。メディアの中心に位置し、それゆえ特有の病理をかかえるパリは、まさにその意味で想像的な解読を要求する「一個のディスクール」「一個の言語活動」(バルト)なのであり、長い時をかけて書かれた巨大な〈草稿〉ともいえるので

ある。本章では前三章とは対照的に実際の草稿への具体的言及がほとんど排除されるのもそのためだ。収められた三編はいずれも読みごたえのある文章だが、なかでも最初の「ブルーストとパリ」は圧巻である。『失われた時』の最終巻「見出された時」が戦時下のパリを舞台としているだけに、この迫力に満ちた都市論は、冒頭文の考察（第一章第一節）と呼応するかたちで本書の棹尾を飾ってもよかつたのではないか、そんな気さえおこさせるほどだ。

本書がとりあげる〈素材〉としての草稿だけをながめれば、各章は必ずしもダイレクトに関連しあっているとはいえない。だがすでに述べたように、これははじめから著者の意図するところなのである。『失われた時』の膨大な記述量や驚くばかりに豊富な内容を思えば、いかに大部な著書とはいえ、すべてについて具体的な分析を盛りこむことは物理的に不可能であり、いたずらに網羅性をねらえば概説書にならないざるをえない。それよりはむしろ最新の研究成果を反映させながら、いくつかの挿話や主題をサンプルにして、読み手にじっくりと草稿読解の醍醐味を共有させようという戦略であり、著者自身はこれを「デモンストレーション」と呼んでいる（あとがき）。また、通例とはことなり本書には結論部が付されていないが、それも著者の戦略からすれば必然の選択なのである。

生成研究の見事な〈デモンストレーション〉

しかし、どのような素材をとりあげようと本書に一貫して認められるのは、著者が草稿の意味を探索するための手がかりを必要に応じて種々の文学理論や伝記的・史的事実に広く求めていく、その柔軟な姿勢であろう。特定の批評軸に拘泥するあまり、〈読解の多様性〉という本来の意図とは逆に図式還元的な結論に自足してしまう解釈が往々にして見つけられるだけに、草稿の語るところに丹念に耳を傾けるといふ当然の配慮をのぞけば、いかなる方法論的なドグマにも縛られないアプローチはかえって新鮮であり、なによりもそこから導きだされる解釈には厚みと広がりを感じられる。もとよりそここそが生成論の目ざすところだといってもよからう。

以上のように本書は、高度な学術性と最新の研究成果に保証されながら同時に、専門的知識をもたない読者をさえも大作家のアトリエへ、テクスト生成の現場へと誘い、文学創造のありようについて一考をうながす優れた啓蒙の書となっている。ブルーストを読みとく喜びを一般読者と分かちめたいという生成研究の第一人者の願いはじつに巨きな実をむすんだ。

（一九九三年・平凡社刊、A5判、四六八頁、六五〇〇円）

* * *